

## 雪 鋼 常磐 誠

山頂に一台の車が止まっている。タイヤにはチェーンがつけられていることがよくよく見ればわかるが、その体全体に重く覆い被さった小さな結晶の纏まりが伝えるには、この車に久しく動いた形跡は見当たらない、ということだ。

その車の側で一つ、声が聞こえる。少年のような、明るくて、高く、そして通る声だ。

「何日だっけ？」

その声に答えたのは、若い、中性的でありながらも母性のような柔らかさを感じさせる声だった。

「まだ一週間も経っていませんよ。マウ口」

マウ口と呼ばれた少年は、そうなの？ という懐疑の顔を一瞬だけ覗かせたが、

「この山は食べるものに困らなくて助かるね」

という言葉だけを残して、車から離れて行った。

ここで足止めを食らってから三日目。これは春になるまでここで過ごすことになることを考えなくてはいけない。若く中性的でありながらも母性のような柔らかさを感じさせる声を持つ者が、声を発さずにそう思った時に、

「ただいま。マユナ。今日も良い感じだった。本当にここは食糧が豊富だ」

鍵のかかった小さな手持ちの籠と、大量の野草を入れた背負い籠を積もった新雪に降ろしながら、ユタカが言った。

「ご苦労様です。ユタカさん」

マユナがそう言いながらユタカの置いた手持ちの籠を持とうとすると、ユタカはそれを左手で遮り、無言で首を振った。これは重いよ。すぐにそう小さく呟いた声はマユナの耳にようやっと届くくらいで、決して強くはなかった。体つきもそうだ。百七十を超える背丈は男性としては標準的でしかない。体格的な、男性的な強みをユタカは持っていないと言って良いと思う。それでも、ユタカは行きは歩きで三十分、帰りは一時間かかるような冬の山路を、二つの籠を持ったまま走って行くのだ。当然、帰りの道には釣れたワカサギを生かすための水が入る分、重みは段違いになる。それを持ち、ユタカはこの六日間毎日走り続けていた。そしてこれから先、春が来るまでそれを行うだろう。それを誰が頼んでもない。端正な顔立ち。目立つことはなくとも、屈強な肉体と精神。マユナは疲れた様子を微塵も見せずに走るユタカの背中を見ていた。それから間もなく、

「寒くない？ マユナ」

何時の間にかまた車の側に来ていたマウ口の問いに、マユナは、

「ええ。少し冷えてきましたね。やっぱりここは寒いです」

微笑みながら返した。あなたは大丈夫ですか？ その問いかけに対してマウ口の方は、

「うん。大丈夫だよ。だって、ほら」

マウ口は自分の両腕を地面と水平になるまで上げて見せた。翡翠色の冬毛に全身を覆われた姿。雪に接して霜焼けを起こさぬよう持ち上げられた長い尻尾。そして答える。

「ボクはヒトじゃないんだから」

そう言うとマウ口はマユナに抱きついた。ふわふわした毛と、マウ口の体温。暖かくて、やわらかい。マユナはひとしきりだけマウ口の頭や体を撫でてから、両腕を解いた。ありがとう、という一言も添えて。

「えー。もっとぎゅーってしてたいな。あつたかいからいいじゃん」

マウ口はそう言ってマユナの右腕を掴んでゆさゆさと振ってきた。

「ダメです。いつまでもそうしていたってどうしようもないでしょう？ 夜ご飯も作れませんよ」

なだめるようなマユナの声聞いて、マウ口はしぶしぶテントへと歩き出す。マユナがその横についている。マユナと一緒にのっしのっし、新雪に足跡を残す。ヒトの足跡。マユナの足跡。ヒトでない足跡。ボクの足跡。少しだけ、笑う。マユナが傍にいてくれる。そのことがやっぱり嬉しかった。

次の日にやっぱり太陽は昇った。けれど雪は溶けない。積もりに積もった雪に、わいきゃい。わいきゃい。子ども達の声が響く。ぼすん、ぼすんとマウ口の足が雪を踏みつけ大きな獣の判子。その傍にマフラーに分厚いコート、そして更に手袋着けた二人の子ども。二人ともが、雪の中で浮き上がるような黒を身につけて、でもその表情からは黒く分厚いコートに手袋やマフラーの重さは感じさせない。四つの踵。四つの足跡。ふしゃ。ふしゃふしゃふしゃ。小さな長靴で出来た四つの判子は小さく、そして同じ大きさだった。

ぴっぴ。ぴっぴ！ 笛を吹く女の子。ぴびぴっ！ ぴびっぴ！ 何重にも重ねられた無数の判子は実体を判別出来ないまま白い結晶を地面に変えてゆく。その横で女の子の手を握り、女の子がバランスを崩してしまわぬように支える男の子の顔は、その女の子の顔のそれと同じ。同じ顔。

「はしゃぐのは良いけどさ、気をつけろよ。キーサ。危ないだろ」

しょうがないなあ。小さなため息混じりに放たれる言葉と呆れるような声。

「ギースは過保護なー。こんな雪の中じゃ頭打ったって何もないのにねー。まったくもって過保護なー。ギースはカーほごー！」

答えたのはキーサではなくマウ口だった。ゴローン！ 踏み固めて作った小さな山の天辺から、後ろ向きにマウ口は転がり落ちて見せて、

「なー」

きゃっきゃと笑いながら尻尾と手足で雪を叩いた。叩かれて舞う雪がキーサとギースに降り注いだ。ぴっぴびび！ という笛の音と、

「何すんだよこのデブ！」

という声が同時に響いた。

「誰がデブじゃチビ！ ボクは適性体重だ！」

マウ口のもう何度繰り返されてきたかわからない反論と侮辱が帰っていく。こうなれば売り言葉に買い言葉だ。ギースはこう言う。

「うるせーんだよデブ！ 僕は10歳の平均身長だろうが！」

マウ口の言葉はこう続く。

「お前こそうるさいんだクソチビ！ 僕だって10歳の平均体重だろ！」

そしてこんな感じに続いていく。

「お前何キ口だよ」

「90kgだよ」

「そのどこが平均体重だよ太り過ぎだろダイエットしたら？ クソデブ！」

「言ったなこのチビすけ！ マユナが調べた文献でボクの体重がこれくらいで問題ないっていうのは確認済みなんだよバーカ!! お前こそそのちっこい体をカバーするためにマユナにシークレットシューズでも作って貰えばー？」

「何だともう一回言ってみろよデブ！」

「何遍でも言ってやんよ双子の妹よりもチビなギースのクソっチビー！」

「ふっざけんなブツ殺してやる！」

この言葉の流れをまだキーサは聞いていない。……あくまでも今日は。だが毎日のように飽きることもなく、多少のレパトリーや言葉のズレはあっても同じ意味しか繰り返していないガキ同士の口喧嘩に、もうキーサは飽ききっている。自分も同い年のガキであることは一先ず棚に上げておき、ぴー、という小さな音

をたてた。この音が「男子ってガキよねー」という意味合いを持つものであることは未だに飽きもせず口汚く罵り合っているガキ二人に限らず、聞いた者になら容易く理解出来るようなものではあったが、今回のぴー、はキーサ以外の誰の耳にも入ることはなかった。

さくっ。どさっ。さくっ。どささっ。動かない車の上に積もった結晶を地面に降ろす。ユタカ、遍、マユウの男衆は誰も何も言わず、黙々と作業だけが続けていた。

遠くの小さく盛り上げられた白い山の辺りから、二つ、怒鳴り声が聞こえてくる。きいきい。やあやあ。子どものケンカ。興奮して、甲高くなって、風に乗って鼓膜を揺らす。きいきいきい。やいやいやい。

「ガキどもは平和で良いっすね」

遍は手袋を填めた手で車体の上に固まった結晶を払い落とす。落ちた結晶は下の結晶と同化する。落ちるまではちょっとだけ違う結晶。でも、落ち切れれば、他と同じ結晶。もう見分けはつかない。何故そんなことを思ってしまうのだろう。何故、そんな結晶に興味を持つのか。師匠とユタカは一瞥もくれず結晶を落とし続ける。この結晶を溶かして熱して飲み干す。その繰り返しで幸いにもこの場所で渴くことはない。

「遍もあの中に入りたかった？」

ユタカは遍に近づいて声をかける。昨日マユナに声をかけたような、穏やかな声ではなく、どこか楽しげな、軽いおちよくりのようなトーン。表情をみればわかる。イタズラをしかけるような、周りを埋め尽くす結晶以上に眩い歯を見せて無邪気に笑って見せていた。

「……勘弁してくださいよガキのお守りなんて。五月蝿いのは嫌いです」

あれ、そうだっけ。……柔和で、穏やかで、優しいのに、どこかやんちゃで楽しげな声。不思議な声だ。遍は思う。自分と同じ人間だというのに、どこかで惹かれる部分がある。何に、どこに、という具体的な世界ではなく、いつの間に、心の中の何処かで、ユタカという男に惹かれる。師匠や姉さん、他の連中の中にもユタカが存在や軽口を批判したり、嫌悪したりする者はいない。皆が口にはしないがユタカという男に皆がどこかで惹かれているのかもしれない。

「……方はずい。戻るぞ」

マユウがユタカと遍、両方に聞こえるだけの声で伝え、テントへと戻って行く。うん。了解です。二人は先をゆくマユウの一、二歩後ろを横に並んで歩いた。歩いている最中、誰も何も言わなかった。地面に残る三人それぞれの足跡の、体つきよりも小さいのを見れば、そこからは体重の乗せ方の工夫を思わせる。はしぎたてるような歩き方はしないで、常に早足で歩き続ける。無言であるにも関わらず、音は聞こえない。地面の結晶を踏み砕くことも踏み締めることもしていない、まるで浮いているような感覚を呼び起こさせる程、三人は無音だった。

三人がテントに戻ると、そこには何か白くて丸い、人抱えあるくらいの物を大事そうに抱えるマウ口がいた。また何か変な物を作ったか、それとも拾ったか。好奇心で軽はずみに動くマウ口に対して三人はあまり意識を向けることはなかった。もう慣れていたということもあるが、それ以上に、

「あ、こんにちは。自分はユキヤと申します。マユナさん達に助けていただいて、足もない状態なもので、しばらく置いていただけの事になりました。お世話になります」

テントの中央、銀髪の若い男がそうやって頭を下げている姿の方に意識も視線も向いたことが大きかった。

「新発見！ 超発見！ 大発見!!」

マウ口が興奮して叫び両腕に抱えたまん丸の物体を抱え上げる。ここでようやくユタカが気づく。

「ん。そういえばそれってこちら辺の木によく育ってる実だね。それがどうかしたの？」

マウ口は興奮冷めやらぬ感じで鼻息荒く、これユキヤのお土産！ と叫びながらテントの中、テーブルの上にとんと音を立てて丸い果実を置いた。これすんごく美味しいらしいよ！ という声まで上げて。

「分かりやすく訳してやると、早く食いたい、食わせろ！ だな」

遍が呆れたように言うと、コロリン！ マウ口はテントの中で転がりながら、

「その通り!!」

元氣よく答えた。ニコニコと笑うマウ口を横目にしながらユタカはマユナに話しかける。

「相当ご機嫌だけど、でもあれは硬いよ。たぶん包丁やナイフなんかじゃ歯が立たない。というより、あれは食べられるものなのかな」

「ユキヤさんが仰るには大丈夫だそうです。ただ、ユタカさんの言う通り、途轍もなく硬い皮が曲者なのだそうで、ユキヤさんの国でもあの皮を割るのに特別な機械を導入する程なんだそうです。……ちなみに、高級食材なんだそうですよ」

ユタカの質問にマユナが耳打ちする。細い、柔らかな絹のような声。二人の視線の先にはゴロンゴロンと転がるマウ口の姿がある。二人は、それを見る。

「あの子のはしゃぎっぷりも相当ですね。まだ食べてもいないのに」

柔らかく笑うマユナにユタカは言葉が出てこなかった。あまりの寒さに舌が凍えてしまったのかと思った。でも、そんなバカな。すぐに思い直して、

「ユタカさんも、やっぱりおかしいと思うでしょう？」

マユナの言葉に相槌を打つようにして笑った。その笑顔の理由や意味がマユナの意図と違うことを、マユナに触れていない今なら気づかれることはないと思った。

「しかし、あんなに大量にある物が高級食材だなんてね」

ユタカは今まで抱いていた気持ちをマユナが察してしまわぬよう、話題を元に戻す。

「ええ。ただ、大量にあるとは言ってもあの実が実るのはこういった山頂付近のような高所だけで、しかもあの皮の硬さです。ユキヤさんの国でもあの硬さに相当手を焼くみたいで、機械は高価でなおかつ壊れやすいんだそうですよ」

「なるほど。あの実自体が高いというよりは機械が高い故に高級食材、と。面白い話ですね」

ユタカよりも先に遍が返事をした。

「ま、俺には物の高い安いはわからないよ。それより問題は味なんじゃないかな」

ユタカの返事は遍と比べればシンプルなもの。

「その通りですね。では準備をしましょう」

マユナがテーブルから果実を取り上げるのと同時に、マウ口の目が分かりやすく輝いた。マユナはそれを持ったままテントの奥に佇んでいたマユウと一言二言会話を交わすと、すぐに戻り、テーブルの上に果実を置いた。マウ口はそれと同時に慌てた様子でマユナに追いつがる。

「マユウは何だって？」

ユタカが聞くと、右腕に果実を抱えたマユナは特に表情を動かすことなく答えた。

「俺の刀であんなものを切るな。だそうです。別に構いやしませんよ。働かざる者食うべからずです」

マユナはそのまま後ろで自分の左腕にまわりつくマウ口の方に顔を向けてなだめるようにして、

「そんなに食べたいのになってという呪詛を放たなくとも、ちゃんと手伝ってくれたら食べられますから」

と伝えた。マウ口の目に輝きが戻るのは一瞬の出来事で、それを見ていたユタカや遍は無言のまま呆れ、ギースは、

「食い意地張りまくりのデブめ」

と一言放ち、マウ口から睨まれていた。マウ口がギースに掴みかかるようなことになる前に、

「では、あつちで準備しましょう。マウ口、手伝ってください。キーサさんもギースも一緒をお願いします」

」

二人の間に入る一言でマユナが止めた。ぴびっ。笛の音と一緒にキーサは立ち上がり、ギースはぶつぶつと文句を言いながら、四人で一緒にテントの奥へと消えていった。

さて、と。四人を見送った後、遍がユキヤに向けて大仰に口にした。一つの問いかけ、というよりも、詰問の合図。食べ物に見事釣られたマウ口は論外として、子どもの前で客人を疑うような真似をすることを多少ためらっていた遍にとって、今は良い機会だった。

「ユキヤさんはどこからいらっしゃったんですか」

「すぐそこですよ。山を東側へ降りてすぐの国です。丁度自分は出たばかりなんです。……こんなに雪が積もっているなんて思わなかったです……。スノーモービルで登って来たのですが……いやはや、こんなにもあっさりと壊れてしまうとは。あの吹雪は大変でしたね。皆さんも無事で良かった」

その国は自分達がこれから向かう国だ。丁度その国からの人間と出会えたことは、なるほど都合が良い。国についての情報が手に入る。

「どんな国なのですか？」

「良い国ですよ。本当に素晴らしい国です！ 四季の一つひとつが美しく、筆舌にも尽くし難い程です。アハハ、まあ……今年は冬がちょいと、強烈過ぎますけどね」

国を敬愛し、好き好んでいるこの男がどうして国を出ることにしたのか。気になった遍は聞いてみることにした。

「国を出るのは簡単なのですか？ どうしてこのようにして国を離れることになったのか、非常に差し出がましい質問ではありますが……」

「ああ、どうか気になさらないでください。いえいえ。単なる観光旅行みたいなもんです。自分の足で動き回る旅というものに憧れていたもので。……国の中は、正直広いとは言い難いですもので。もう全てと言って良いくらい踏破してしまいました」

「旅行がお好きなのですね」

「ええ。様々な場所の文化や様子を見るのは本当に興味深く素晴らしいことです」

「……ただ、正直今回は舐めていたのでは？」

遍は話を切り出した。

「まず貴方の旅荷物は軽過ぎる。スノーモービルが動かなくなったことは多少予想外の出来事だったとしても、それでももっと大量の荷物を用意しておくのが普通かと」

「ええ。そうですね。これは失敗でした。皆さんに出会えていなかったら野垂れ死にはまぬがれなかったでしょう。感謝していますよ。そして落ち着いたら皆様と一緒に故郷へ戻るつもりです。歓迎いたしますよ」

「誰が言った」

マユウが厳かに告げる。

「……え？」

ユキヤは今自分が何を言ったのか、というより、自分の言ったことの何が問題だったのか、わからずにいた。

「誰が次の行き先がお前の故郷だと言った」

「え……マユナさんが、確かそう仰っていませんでしたか？」

「仰ってないですねえ」

綺麗に人数分に等分された真っ白の果実を持って戻ってきたマユナがそう言いながら笑顔で戻ってくる。

「どうぞ。高級食材だったそうですし、まだ食べたことがないとおっしゃられていましたね。どうぞ」

その内の一つをユキヤに差し出す。その時だった。

「動くなあ!!」

ポケットの中から取り出され、マユナの頭に押し付けられたのは、小型の拳銃。ユキヤは黒く、鈍く光る拳銃をマユナに押し付ける。マユナのパーティーはユキヤを取り囲む。

「あらあら。捕まってしまいましたね」

そう言ったのは、他にもないマユナだった。

「ええ。捕まえてしまいました。大丈夫ですよ。貴女が最初に逝ってしまっても、すぐに皆が後を追ってくれますから、安心してください」

「なるほど。それが貴方の『仕事』ですか」

おとなしくしたまま、少しおどけたようにして言うマユナの後頭部。強く押し付けられる拳銃。撃鉄に指はまだかかっていない。マウロがグルルツ！ と唸る。その目には明らかな殺意が見える。

「大人しくしていなさい」

そう言ったのは、

「貴女がそう言ってくれると助かりますよ。マユナさん」

マユナだった。

「どうしてこれが私の仕事だと？」

穏やかに、だが頭に強く押し付けられた拳銃だけは離さずにユキヤは尋ねる。この拳銃さえなければ、それはまさしく穏やかな会話でしかないように見える。

「山の中腹にスノーモービルが一台放置されていましたね。うちのメカニック曰く、全く問題はない、とのことですが」

「うちのメカニック？」

ユキヤが怪訝な顔をして周囲を見回すと、

「ボクだよ。あれさ、随分こまめに手入れされてたよね。もうさ、ボク達から巻き上げた荷物とか大量に引き揚げて持って帰るつもりですって感じ」

マウロがトーン低く言うと、

「ああ、この仕事は殺した旅人の荷物の中に紛れ込んでる金目の物とかって、あるだろう？ 全部仕事をした人間の取り分になるんだよ。良い仕事さ」

何でもない、という風にしてユキヤは語る。

「てゆーかさ、勝てると思ってるの？ この人数に？ 立った一人で」

ギースの手に握られているレイピアがひらり、翻ると共に微かな光の軌跡が見える。

「ははっ！ 勝てるかとか、そんな問題じゃないだよガキが!!」

唐突に言葉を汚らしくしたユキヤがマユナの頭から拳銃を離し出口側へ発砲する。そこにいたユタカはキ一サの手を握り一緒に避けた。その穴を縫ってユキヤはマユナと共にテントを出てゆく。

「さあて、お前ら、全員武器を全て捨ててもらおうか。安心しろ。金目の物は全部ありがたくいただいて、金に変えてやるよ」

一先ず全員が武器を捨てる。捨てながら、ユタカが尋ねた。

「そういえば、仕事の内容を聞いていないな」

それを聞いたユキヤが答える。

「無駄口を叩くな。……と言いたいところだが、冥土の土産だ。答えて置いてやろう。我等の国に獣人は入れない」

獣人、という単語の瞬間に皆がマウロを見る。

「失礼だな！ ボクは龍人だぞ!!」

憤慨するマウロだったが、

「どちらにしても同じことさ。お前みたいなケダモノ。みているだけで吐き気がする。そしてそれを当たり前のように受け入れるお前らみたいな連中も。本当に理解し難いよ」

冷酷にユキヤは拳銃を改めてマユナへと向ける。

「さて、それでは武器を捨て終えたところでお前ら全員外に出てもらおう。それから、全員処刑だ。ケダモノ。お前は最後にとって置いてやる。お前だけはゆっくり鬨り殺しにしてやるよ。ククハッ！」

ユキヤが先導する形で全員がテントの外へ出る。

「しかし、このようなことをする人がいる国が素敵な文化や歴史を作っているとは思いませんね」

マユナの発言に、

「末期の言葉か？ 我等の国は汚れた獣人の血を排除することで作られた崇高な国だ。貴様らのようなケダモノ好きにはわからんだろうがな」

ユキヤは答えた。マユナの返答は、一瞬。

「ええ。わかりま——」

その言葉を、ユキヤが聞くことはできなかった。

ねえ。雪の積もった山頂で、よく通る少年の声がした。その少年のような声の持ち主は、自分の腕に特別な色がついていないことを確認しながら、無事に開放されたマユナに向かってしゃべりかけていた。

「この人はさ、今日、ここでこうやって死ぬことを予想できていたのかな」

その少年とその仲間の前には、一人の男の死体が横たわっていた。仲間などでは決してない。でも、行きずりの死人という訳でもない。少年にも答えはわかっていた。

「わからなかったことでしょうか。そしてマウ口、あなたもその答えはわかっているはずですよ。そういうものなんですよ」

マウ口と呼ばれた少年が答えを發した女性の方を振り向いて、言った。

「うん。でも、やっぱり、……そういうものなのかな。マユナ」

マユナと呼ばれた女性はもう一度、短く答えた。ええ、そういうものです、と。その言葉を皮切りにして、仲間が一人、また一人、拠点としていたテントへと戻って行く。積もった雪の冷たさがわかる。雪は降っていないくとも、昨日まで降り続けた雪の溶けることはない。

「寒くない？ マユナ」

マウ口の問いに、マユナは、

「ええ。少し冷えてきましたね。やっぱりここは寒いです」

マウ口に対して微笑みながら即答した。あなたは大丈夫ですか？ その問いかけに対してマウ口の方は、

「うん。大丈夫だよ。だって、ほら」

マウ口は自分の両腕を地面と水平になるまで上げて見せた。翡翠色の冬毛に全身を覆われた姿。雪に接して霜焼けを起こさぬよう持ち上げられた長い尻尾。そして答えた。

「ボクはヒトじゃないんだから」

マウ口はテントへと歩き出す。しばらくしてから、

「でもまあ、最後に土産はくれたね」

側の木になっていた果物を取った。あの時裏でつまみ食いしたおいしい果物。テントまで我慢できませんか？ マユナの声も聞こえないフリで、しゃく！

その瞬間、どさり。木から雪の落ちる音がした。誰も振り返ることはしない。さっきまでそこにあった泣き別れの首は、何時の間にか見えなくなっていた。

——了——